

陶芸教材の研究 (二) — 土笛教材の他教科との関連性と独自性 —

菅野弘之

(教育学部・非常勤助手)

A Study of Ceramic Teaching Materials — The Relation and Individuality between Tsuchibue Material and the Other Subjects —

Kanno Hiroyuki

(Faculty of Education)

要 旨

土笛を制作していく技法上の工程を分析し、工程と図画工作科、美術・工芸科以外の教科との関連性を調べた。この調査から、土笛教材の工程を通した図画工作科、美術・工芸科の独自性が他教科との関連性ととも浮き彫りになった。(今後、焼き物を通した他教科とのネットワークと焼き物教育の手引書をまとめていきたい。)

1、はじめに

美術教育において陶芸教育は近年ますます盛んに行なわれるようになってきた。また、一般社会への浸透をみせるなか、陶芸をあつかった生涯学習も盛んに行なわれるようになってきた。私が在住している越谷市でも越谷市生涯学習推進市民委員会がまとめた平成9年度年間生涯学習計画で、陶芸講座が4会場で企画実施される。人気がある陶芸講座は、募集の人数が定員を大きく上回り、抽選で参加者を決める会場もある。陶芸は、現在までさまざまな技法の研究がなされ、刊行されている著述も少なくない。しかし、陶芸教育という視座から陶芸をみたとき陶芸教育の授業実践報告、研究がほとんどである。陶芸技法である「陶でいかにつくる

か」と「どのような学習の展開の可能性があるか」の関連性はいまだ研究されていない状況である。

前回「陶芸教材の研究(一) —土笛・発達段階」^(註-1)で土笛という教材がどのような発達段階で扱っているかを現行の教科書を通して分析し研究ノートとしてまとめた。今回本論において、土笛教材が既存にある技法工程でどのような学習展開とその可能性が考えられるかを小学校の他教科の教材との直接的な関係から考察していくこととする。本研究は、教育現場で実際に児童・生徒・学生に役立てられることを年頭に研究するものである。

2、土笛制作工程

土笛に関する文献は「音を創る 土笛とオ

カリナ」^(註-2) などさまざまな文献があるが、土笛の歴史や技法例を紹介するにとどまっている。このような土笛のおかれている現状から本章は、教育の視座から制作工程をおって系統的に技法を分析していく。本論において、土笛を制作する工程から大きく分けてA材料をつくる、B成形、C焼成、D彩色、E使う・みるの5つに分けることとする。この5工程は「制作意図」や「授業目標」によって順序が多少入れ替わったり他の工程と同時に進行する場合もあるが、土笛制作においてどのような制作工程をそれぞれの制作過程で選択するかによって学習する内容が変わるかを本章で分析することとする。分析するにあたり、土笛の制作工程を5つに分けることで問題となるのが、練り込み技法のように複数の工程にまたがっている場合であるが、本論においてはどこかの工程に属することで重複はさせないで分析することとする。

A材料をつくる

材料をつくる工程は「どのような材料を用いるか」がこの工程の主要素であり制作意図（授業目標）と直結する接点である。この工程は職人言葉でいう「土作り」にあたる。

- a 原土から陶土を作る
- b 陶土の成分調整
 - ・土と土のブレンド
 - ・土への原料のブレンド 等
- c 練りこみ

B成形

成形の工程は「形を如何に作るか」ということが主要素であり、制作意図（授業目標）と直結する接点である。

- a 直接成形
- b 型成形
 - ・たたらによる型成形
 - ・鋳込みによる型成形

C焼成

焼成の工程は、作品をどのような焼き上がりにするかがこの工程の主要素で制作意図（授業目標）と直結している点である。焼成の分け方については焼成温度によって分ける方法と焼成の方法によって分ける方法があるが両方を加味した区分をすることとする。

a

温度による区分	方法による区分
低火度焼成	素焼き 黒陶（焼き）
一般的に800℃ぐらい	楽焼き 野焼き

b

温度による区分	方法による区分
高火度焼成	酸化焼成 中性焰 還元焼成 還元落とし 炭化焼成 その他釉に合わせた焼成

D彩色工程

彩色については工程の時機から焼成前・焼成・焼成後の3つに分けることができる。

温度による区分	方法による区分
焼成前	素材づくり 練り込み
焼成	素焼き 楽焼き 黒陶 野焼き
焼成後	水溶性絵の具 油性絵の具 漆 柿渋 等

E使う・みる

土笛は実際に手にとって使ってみることができる。生活から生まれた文化の一つであり

実際に使用することで使用者が土笛からさまざまな事柄を感じとることが重要である。

3、工程別にみる他教科との関連性

本章では第2章の土笛制作工程の分析をうけて図画工作とそれ以外の教科との接点について考察していくこととする。現在小学校で実施されている科目で土笛の制作工程又は土笛自体の使用と何らかの直截的な関係のある科目と教材を現行小学校教科書を用いて調べた。(ここでいう直截的な関係とは、関連ある教科の授業と土笛の工程過程でいずれかの授業内容に取り入れることが可能であるものをいう。)

調査結果

土笛の工程	関連のある教科
A 材料をつくる	理科 小学校3年生 「土と石」 小学校4年生 「流れる水と土地の変化」 小学校6年生 「土地のつくりとでき方」
B 成形	
C 焼く	理科 小学6年生 「物の燃え方と空気」
E 使う みる	社会科 小学校5年生 「伝統産業」 小学校6年生 「日本の歴史」 音楽科 生活科

以上のような結果となった。

この調べの結果からA「材料をつくる」、C「焼成」、E「使う、みる」については他教科との関連性があり授業を計画する上で教科の枠を越えた教育が可能となると考えられる。

ただし、これに下記の図画工作の教育内容を照らし合わせてみると焼き物教育は5年生からはじまっているため発達段階やカリキュラムの進度を考慮する必要があると考えられる。

〈単元教材による区分〉

日本文教出版「図画工作」教科書 (註-3)

	粘土教材	陶芸教材
1年生	・みずのぼうけん ・のせてみると ・なんでもランド	
2年生	・かたちのなかま ・ケーキづくり ・ねん土のしりとり	
3年生	・どうぶつとわたしのひみつ ・ぎざぎざ	
4年生	・二人で ・切る、つむ、包む	
5年生	・ねん土からでてこい ・かいりきパワー	・ガウディのように
6年生	・人のすがたを追って	・ねん土を焼いて

東京書籍「図画工作」教科書 (註-4)

	粘土教材	陶芸教材
1年生	・かお かお かお、 どんなかお ・レストランにいらっやい ・ふしぎな さかな	
2年生	・へんしんねん土	
3年生	・いっしょに 楽しく	
4年生	・どんな生きものが いたのかな ・動きをとらえて	
5年生	・これは何だ?	
6年生	・めざせ、オリンピック	・大昔のくらし ・手作り楽器で音楽会 (一部作品掲載)

開隆堂出版「図画工作」教科書 (註-5)

	粘土教材	陶芸教材
1年生	・きょうりゅういっぴき くださいな	
2年生	・グアナコ アノア パラールって ・ねん土はつづくよ、 どこまでも	
3年生	・どうぶつ村のきょく げい大会	
4年生	・きみはねん土のマジシャン ・うすーくのぼして	
5年生	・たまごから生まれた 意外なドラマ ・心にひびく白いかたち	
6年生	・ねん土の岩が…、	・土と炎のレストラン

他教科との関連性がない工程はB「成形」、D「彩色」工程である。この工程自体は上記の表からわかるように粘土教育からの積み重ねの発展として陶芸教育につながっていることがわかる。B「成形」、D「彩色」が単独的な存在で他の教科との関連性が薄いことが、直ぐ様図画工作の教科としての特質を内在していると考えすることは性急であるが、美術科教育の存在する重要な要素であることがここにわかる。

おわりに

私たちの「性」は、より自分と遠い遺伝子をもったもの同士が受精しやすい性質をもっている。自分と違う遺伝子を取り込むことによって新しい「生」が誕生する。「性」自体が

「生」の本能として多様を希求しているといえよう。

現在、図画工作科の評価は複数の観点からの評価となり、複数の観点となったことで多様な評価が望めるようになったが、今後の新たな課題としては、教育の自由化（教育の自主創造）にあると思う。何を学ぶのか、何をすればよいのかをもう一度、問い直していかなければいけないだろう。一斉画一、〇〇方式、自由勝手、教科書等依存、作品主義等現在指導者や児童・生徒がしばられている制度や慣習を検討していかなければならないであろう。「性」自体が「生」の本能を自然の行為で行なうように私たちは児童自身が学ぶことの多様化を自然なかたちで行なえるようにしなければいけないと思う。今後陶芸を通した美術科教育をすすめる上での研究課題としていきたい。

註-1「陶芸教材研究（一） — 土笛・発達段階 —」、菅野弘之、1996年、文教大学教育研究所紀要 第5号、

註-2「音を創る 土笛とオカリナ」、原子光生、1992年、2月1日、株式会社安部書店

註-3「図画工作」1から6まで、宮坂元裕 他2名、平成8年2月15日、日本文教出版株式会社

註-4「新編 新シ図画工作」1から6まで、樋口敏生他7名、平成8年2月10日、東京書籍株式会社

註-5「図画工作1から6まで、日本造形教育研究会、平成7年12月5日、開隆堂出版株式会社